



乾杯群

第六輯

● 一九二六●十一月版

● 中野勇雄：秋の詩 九篇

● 小林直人：夜と秋 外二篇



秋の詩

中野 勇雄

あんまり背丈の伸びた
ダリア ×
腐れ壁に寂しく
寫つた空に自分のこゝろが伸縮する

發射した彈丸が外れて ×
日あたりで遊んでゐる
赤トンボだ

一匹の犬 ×
白い犬
ごろりとなつて
秋は瘦せたね
赤トンボがいつばいたかつてゐるよ
空

赤トンボ ×
赤トンボ
溜り水に咲いたタンポポの毛だ

×
猶太人の令嬢に惚れられた
赤トンボよ

秋の飯さびしんでゐるよ ×
腹はつた虫類のころで
赤トンボと戯れ

眞紅草の實となつて ×
この蒼空を遙々落つこつてゆく

きごちなくかさす手 ×
火の色
親しんだ眼

一本の立木から ×
秋沫光霧十數里だ

夜と秋

小林直人

カーテンに映る魚貝の暈— ●

青澄んだ鉦が
卓机の上で夜空を咲いてゐる

命が
今夜きり更る珈琲皿だらうか

●
虫類の婚禮唄を
桐の葉ツバは知つてゐる—
腕を組んで

青い林檎のやうな
煙草の戀を考へやう

●●●

電車は毎日お天氣にさらされて
心臓が乾いたのて
賑やかな公園の角から
嬉しがつて空へ登つちやつた
ギルトンギルトンと登つちやつた

女が澤山乗つてゐていゝお天氣なので
電車は愚かな爬虫類になつて
海邊のキネマのやうな僕の憂鬱を蹴飛ばして
空へ登つちやつた

●●●

船長が鰐の巢を賣りにきた
船長は一本のヘアピンを持たない

船長は枯葉か金貨のやうに
カルケツトの麵羊を創り初めた

山脈の蔭の湖に雪がたまつて
海濱の鰻がアイスクリームを舐めてゐる
ビルディングの屋上から吊るされた貨物自動車
が鰻のやうにはんくしてゐる

女よ女よ

今晚の風は舗道を訪ねないとして
僕が街頭に堅琴を弾いたとて
林檎はポインターの犬のやうだ

船長は煤煙の中の兎の毛髪で
船長は罐詰のやうに電車に搖られてゐる

大正十五年十一月一日發行

東京府下龜戸町二の九六東京電力内
福島縣平町二の三〇

小 林 直 人
中 野 勇 雄

發行所 福島縣平町二の三〇中野方

印刷所 東京市淺草區馬道町五の八

乾 杯 群 社
香 文 社

●發表が後れゝは後れる程私は
自分の詩に對する感興が殺され
る。こんな風であるから乾杯群
6を早く出す——それが遅れた
遅れた。氣を揉んだのは私ばかり
ではない。その上周圍に對す
る催告の返答に秋の日の影深い
こと。

私は今今までの自分の詩に對し
て異端を感じてゐる。

中野勇雄記